

續
近世奇人傳

二

部類	常壽縣賀滋
提號	五
記号	五
冊數	一



藏書印
中華書局影印
豐國公書印

續近世畸人傳卷之二

里村銀巴

里村銀巴者此へ松平氏。初ノ無名。中呼應院
の唱合より。もやく志もりて。乍らいやさしくり
き。凶氣を失ひにすまんといふ。既に肉桂トニテ時宗
乃僧なり。久々南都よきあり。達子とぞううが
すれど。あれをぬじむす。ひようのち。紅色よりすり
至土の連歌師太東正云にすみひうちせり。智そひ
因程よりひじり。年七十のじよ。是もあくまではま
て。それ故めにひづる王侯士庶。いふ所。うづくめ。そ
れ天下にあまし。はよ里村昌巳あり。連号に昌之。銀
巴。其名を齋す。以。ねその氏もひづる。よもやうとぞ

の里村と聞へし。又院に於の年ハ三條西福名院西ノ
院ト亦即公の御深草を臨に齊の三字ある天童の美
史乃は去る南都す。往くより。徳宗は猶もそれと
因ゆて改む。而皆先君本願に押して事事行は。故
信述のせり。是を仰めえり。ひまうに猿狹さなとされ。そ
南漢陽光院の宮後陽光院の御文書局位の小院の御跡となり
城久遠つゝき陽光院宮の草は。よ連とせ給す。事急すれ
あ無く。す段とぞ。もとを。おもと。おもと。門と。と
やう。同裏とぞ。もとを。おもと。おもと。門と。と
賜す。小恩が附す。は。やう。は服を。め。り。て。の。
先と。かくて。前と。の。年。豈。御。を。ば。う。ん。や。く。ふ。め。い。
は。構。よ。懶。く。豊。太。岡。八。時。よ。も。ち。。運。幕。と。じ。す。も。石
手。と。う。枝。柄。め。て。も。者。支。船。巴。す。人。と。も。と。大。放。御。門
塔。の。ま。あ。る。船。大。す。も。お。蟹。町。と。り。大。放。門。八。月。三。日。宝。珠。庵。名。門
花。頬。云。三。日。二。千。五。と。も。か。御。敵。少。す。と。蟹。巴。の。よ。ま。仰。云。仲
中。在。名。ま。二。千。五。と。も。か。御。敵。少。す。と。蟹。巴。の。よ。ま。仰。云。仲
小。よ。く。業。と。聞。り。と。小。底。生。の。蓋。肩。承。よ。る。小。底。ア。組
母。の。玄。仲。の。ち。か。れ。ハ。モ。詳。貌。と。名。よ。キ。口。く。ま。ん。け。れ。ハ
先。此。貌。を。差。南。院。の。と。又。聖。母。と。名。よ。キ。口。く。ま。ん。け。れ。ハ
モ。一。も。不。と。掲。ぐ。わ。の。負。山。房。ア。戴。恩。記。よ。く。れ。る。蟹。巴
負。山。房。ア。不。と。掲。ぐ。わ。の。負。山。房。ア。戴。恩。記。よ。く。れ。る。蟹。巴
の。も。卷。八。蟹。巴。と。り。て。去。計。大。考。ア。ア。終。義。江。作。と。み。ん
や。も。す。う。ふ。ア。モ。う。寝。と。着。て。も。立。う。た。と。小。家。叔。竹。の。腹。作

とて。ふすま林めり序句と作成。紙色ニニ遍沈水
まだ。紙色が筋を清らか。雪へふるひ。万合
くわくせう作成時。紙色うちき倒す。蓋法
ふすます。づすまくと作成。下にれ
不斜兵ト。紙色のり。とすまとげるよ。がう
三才に響く。貞は義とすひ。かたれす
ゆりう。

さうか。下せよ。承うら。すますがざとしきだ
といひ。かよし。その響くも。元とあがく。ゆき。
ひぬき。度長二年。とは。中西支院。まき
本阿弥光悦

本阿弥光悦。古虚庵。自德齋。達文
佐。本の一族多賛。豊後年萬定の孫。行是。治文
宗春。三男也。あらは。えひが。志。すま。む行は
ハ力無鑑。皇慶。篤。津。扶。等。と家業。これとも。らゆ
の。すも。よ。よ。に。光悦。の。事。小。せ。す。と。の。に
う。す。の。津。城。よ。事。そ。ふ。よ。て。自。の。廢。寺
一ふり。から。の。ま。ひ。ち。か。が。ま。一。す。か。か。ま。ま。か。り
く。の。力。と。相。す。け。ら。す。か。が。ま。一。す。か。か。ま。ま。か。り
通。高。三。教。院。殿。光。悦。ま。う。な。ま。今。天。下。に。神。ま。と。り
ハ。諸。く。と。よ。ど。光。悦。を。ま。て。收。り。君。ゆ。れ。萬。物。の。場。く
お。居。ま。と。藤。ふ。き。の。先。よ。詔。す。作。す。た。召。す。よ。く。お
ふ。り。一。ロ。に。り。す。み。三。筆。天。下。に。名。す。お。の。業。用。ま。

尊純は親王と異なりて四事をもつて藤を以て
三つとも。或ひは親王の後才よりほむる意に合ひ
うべ。やがて事は藤とふたたん光悦とくわれば。行ま
まかうてあつた。ひそかに。おもふらふ仰ます。ぬりまくま
うせゆる。ゆくと。おもふらふ仰ます。ぬりまくま
うせゆる。とあれば。傳意よきが一見けり。也。也。也。
くわらわ。ひそかに。うせゆる。何くわらわ。も
もや威をまつむすり。とね華をまつ。さる。藤と
ゆうれんか。うそくち。とくわぬ。なむへ書
家とみゆーもの。孫過庭。廣世。重。とす。王右軍
とくわぬ。うそく。すくの風とよんで。そよ
ゆとよゆが。その家とまづとまづゆり。またの名と
ゆくらむ。まくし我ぬにまわせ。一あとゆくや
まく。二ふ僕ともまよひやくあそび。うそくまづ
書とゆく。まくすとゆく。歌りうるてゆりぬ。約のうく。歌
詞二ふまわ。ふれゆまく。おまかせ。うそくまづ
とくわぬ。今も迎客流。先秋流。湖中流。とくわぬ
うやまく。うまく。わきまく。善。ほきまく。おまかせ
ぬ高を。うまく。すくわり光悦。うまく。おまかせ。ひそか
野間去澤_{野峰}。ひそかに。うまく。と。日暮れて。湖中。まく
まく。ひそかに。うまく。と。と。陶器と。まく。と。燒。まく。と
まく。まく。まく。凡臺灣のようへ。經濟の干もうち
鳴峰の金源。よどと考へ。えと。と。と。と。と。と。

その一もかへせぬまことにあらむ所めいかうにすがふ。日ト
あ職とてくわめてよりしへ。ぬうやまて。よひきんがとく
金の出納ふ。第、した見。をせうくはおながうおうを
うに。うに。せあうがおきと計とし。うに。うに。うに。
がふうかのとえり。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
もとよ。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
北齊碑とほ。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
義和丹の。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
人をたまひまわして。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。

うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。

固に。え。光緒生年。光緒の養。うに。うに。うに。
え。光緒の。光緒の。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。
うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。

高時云。世間人の。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。

うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。

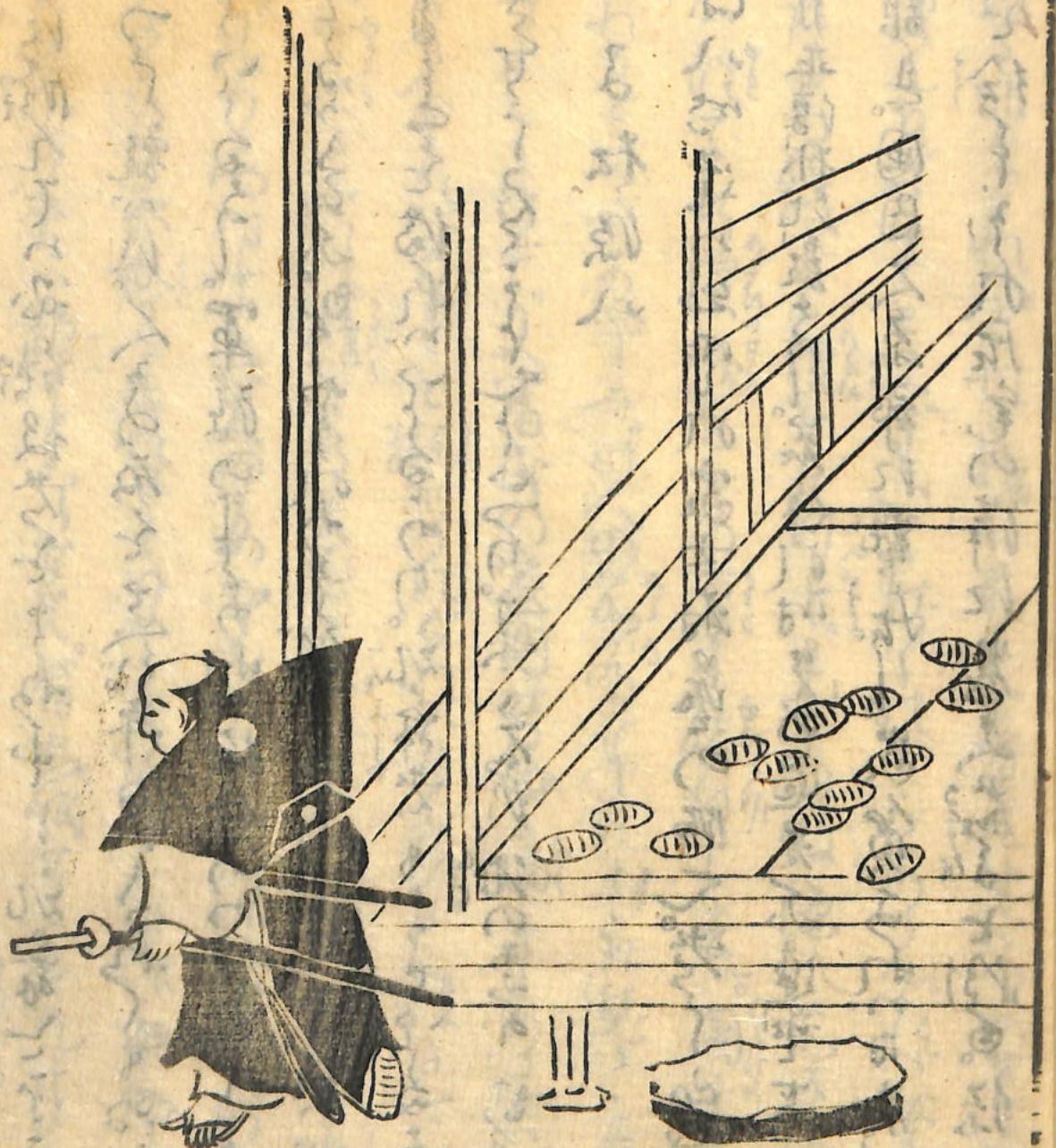
岡野たぬ

昌平在内へと秋家へは。津奥より。うに。うに。うに。うに。

越後守といふ。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。うに。

後漢書

三



もひ毫タダト一箭ナリ。櫻木はの降り城に二箭ナリ。
敵の跡はアリとお嘆のほ。矢取ナリ。尋てあまし。こを寄
シ。彼陣内城とおどもあううド。アヒヘナリ。アマガラス。
け人並ひよ福者アリ。アヒ馬鹿の本向よ。多々金をね
かし。ものうをす。アヒモレ。キ。おうるき。癡翁アヒ。莫全
十ねとら。資アヒ。モハヨロ金アヒ。アヒモ金アヒ。アヒ
アヒ。アヒハ全をうさと。アヒモ小掛。小刀の。アヒ。モと
きく。武士の道アヒ。アヒナ。アヒモ。アヒモアヒ。アヒ
モ。アヒナ。アヒナ。アヒナ。アヒナ。アヒナ。アヒナ。アヒ
アヒセアヒ。アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒ
鹿もアヒ。アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒ
アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒモ。アヒ

やくをうしとはとくまくへじふせぐふとつとさん。
軍陣に隠れてゐる被役者とよみそーれをとひび
ておひつて詫びた。くまのぬとさば。半はばへんとおじ
ふうきいじぬ。軍はのとくわは。ゆにあひてじーされ
まうじとうがくまふ。ゆやかうむじとうじうじはれ
おほのゆうとゆれがとるうり。れゑもよとてうるうれ
れれとさせじとくとじうり。たとへてゆのまくとくく

よね源へ

よね源へは達へゆきの家士村屋の師へ。老くふゆだ。
慈父育正淳朴比教す。義母は久く退失ふ連せちて
通と離と。園内と京都に散らす。お貧すれはは庭
衣食と給ふ。その居宅の洋に墨くわると書る。源へは
また学びふされ。れよ能てあると答ふと、よせまつて
ひくわんかへくとひくと、くげくれようすん。な無す
くくお用意くとも價とうけど。色むほ源へがまと實
とよすへはてれ。價とくわん。うかの葉よおむて去。園を和ふ
疾のひわうとくわよ。けへのわよ。れ葉と。れ葉と
園へ移してうけど。人高氏の家内皆ゆきよ處とあす。源へ
黙固くとくわがとと詫せられ。うか。身もとくわ
う。家のゆくゆく。傳はう失と。方へ服を解りて繻
鶴へ。ひくわの行中。在支のあ生をせしゆへはく。つねじ
鳥とまよ。おもてかはれとくわゆきよ。ゆくは夜ゆくま
御。ゆくと。今事のねくわとて。官歩御せとさんと。樂よ
遊。ゆくと。よね源へは通り度深のぬよ端や。通育とし

と出でりまゆりて二納用ふ事もどつて。是とうむと
つれぐは紙へ乍りして。英業と嘗ふも價を下すとひよほ
飲ふる事下れば。是とばくにあがへ。又、高人を見とせ
たり。家もの價と二ふともうべし。もあは使ひぬと
主はにて。價がて。詔らねば。そく使ひぬといふ
人争ひて。石抱。年少小蟲にして。眼力甚^{いのち}めとす。と
きくに。村時へ。口人側よす。ニモリ。三木下^カ。アヒ
ハ。主業の達ひ。失を放てば。心けり。む後へ。主業と
中ね。失と。失と。老。今。君。すと。不食。も。口。主業と
遙。食と。あ。口。主。不食。も。口。主業と。主業と。不食。も。口。主業と
國。老。失と。失と。は。自。御。署。と。主。國。源。御。日。だ
一。に。飲。水。二。は。主。は。主。病。食。と。不。掌。主。遙。不。食。と。酒。モ

原田長光傳

原田も。萬葉の初。但馬豊島侯のまわりしが。政代では。波瀬と
か。あ。彦。人。鳥。人。而。主。下。人。の。歎。言。も。主。と。か。あ。付
ひ。人。よ。我。村。半。而。半。老。人。下。人。と。背。戸。の。半。れ。像。よ。御。祀。の
本。より。そ。半。の。水。と。主。水。と。つ。よ。そ。本。主。の。半。而。半。か。う。ざ
き。よ。か。く。き。音。ち。と。主。水。と。や。て。わ。半。の。水。ひ。ゆ。り。に
拘。れ。と。戒。そ。の。水。と。拘。て。放。よ。く。ぐ。と。や。く。ふ。く。く。く。く。く。く。
さ。く。一。行。體。深。な。う。に。4。宿。お。み。よ。と。ほ。う。と。ん。八。口。主。六
十九。お。お。つ。よ。叶。ハ。水。お。み。よ。と。ほ。う。と。ん。八。口。主。六
聖。モ。お。く。い。つ。よ。叶。ハ。水。お。み。よ。と。ほ。う。と。ん。八。口。主。六
是。ハ。モ。前。生。の。宿。固。ア。レ。ト。ナ。セ。ナ。ガ。義。ア。シ。ム。ト。ミ。サ。ボ。

ほきのあくまえん。トレ、さかとまうら。すけもじみくぐる
そひ天の船わたりとよみかへたうに。又び人まよはばゆま
まやんとてうら。うらのくそみの酒をくまが。うれつゆと
ひきかどわむくらうづけ。やうでちさんとく。らやく。
御もくもむだらにくまくわべせんうとくはひたふ。まよも
たうロモ。伴舟のすは山田。くまよ向く。けぐれ。せんと
まよの強よ強とつまく。ゆわくとおとめとくらがの
美濃のまくら。まくら。刺とまよひくじと。まくとく
ひりう。大切ふきくら。くら。うらとくら。やくわく。まよひく
のまよにぬもの酒。まよひくとくら。まよひく。まよひく
ひくのうばうひまく。まく。

龍造寺平馬

大和郡の八萬を引き後のは龍造寺平馬。雪氣通入
さうも並にあり。伴まよむなび。西鎌の術よせ。うひ因すり
まよくのうにあきよを。せひくわざ。れりとく。れりと
すが。たよふ。燭と拂。きなとくわが。やう。燭よ切りんと
こうすれうと。けづてそむきと。燭とて面とくわに。すて
君はうじ奴。平馬。燭とて。まわくふくらやう。やれと
あまくしゆく。へね入ら。う。あよさん。とく奴が燭ふく
糸と切らんとてや。じれどうて。燭とくわて。西月く。やま
とねくうぐ。あよすうふ。朱倉の燭。わらで玉く。れと原よ

もへてゐる。人間の心は、人の心のよきものと
悪くと失ふべくありふることなる。がの元と出で
て、まことにあつてはくる。かく未食のまじめにあつて行
かず。おへね納のまゝ。ねまつて下る儀のすゝり。二儀のさき
をぬけりて。ゆきふれりて。ゆきふれりて。ゆきふれりて。
のまゝにまへて。ゆきふれりて。ゆきふれりて。ゆきふれりて。
切なきむちをすと。まのゆきふれりて。ゆきふれりて。ゆきふれりて。
ふづげあれば。うづばるはて。ゆきふれりて。ゆきふれりて。
ども。か一車まで。もへんづばるはて。ゆきふれりて。こひそ。御術のゆく
ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。

校山稿

お山陰校へ遠に渡ねのぐく。ナ貴トテ繕火ト不ふれ。ミ
被富妻コテル。うべ眼ハ高モ。ちと天下にめん
ト歌。十七年の時謙念ふと。いのちの生むよへて製食
れ。三十七。母歿ヒれ。られ。傷。未のまて減ヒ。音ヒト
はく。セリ。是。くら。あ。ま。た。考。中。ふ。あり。ア。の。ア。リ。ク。
諸侯。の。お。よ。新。ア。病。ヒ。金。ス。ト。セ。ギ。セ。ジ。不。丈。君。の。居
ト。あり。ア。に。侍。臣。又。は。う。れ。或。日。も。じ。ト。ら。り。や。よ。市。令。下
す。ん。ヒ。一。ま。し。ト。ア。ト。ア。行。事。モ。ア。ア。ト。ア。レ。月。一。つ。下。れ
シ。モ。ア。ヒ。よ。ウ。ム。ア。ト。ア。モ。皆。大。よ。笑。ア。ア。ハ。欲。モ。ア。ア。衰。ア
カ。ア。ト。ア。底。一。月。ト。ア。一。町。四。方。約。ア。ト。ス。而。石。校。ガ。約。ア
日。ア。う。る。ア。無。ア。モ。セ。ア。ト。ア。シ。ナ。ア。シ。百。石。校。ガ。恩。ア。リ。傳
教。小。住。ア。ア。今。モ。傳。綠。ア。ア。モ。ア。ソ。ア。天。ト。地。傳。傳
文。つ。ね。ア。蘋。ア。モ。ト。傳。傳。送。越。ト。モ。ア。ト。ア。ト。ア。育。人。ト。教。ア。

多。流の高者皆より思と云ひ。京師より龜庵乃比
賜りされと達ふ。乃倉小簞者一流乃規船う。小中無より
京も深くもそぶ縁と出置。永世を活を作。於て是
元禄七年甲戌六月十九日。よ孫子を継とす。と

角倉子以參息言之

先せせはほ。即ち。ほよ。食す。かひ。すまふ。さく。い。う
ほうひ。ひび。家系譜の碑。母。牛村氏夫。二十三甲寅
ふす。天性工役。慶長九年。甲辰也。事に。うち。義
地圖。す。よ。か。射。の。船。並。と。と。て。而。川。よ。て。舟。と。行。ア。ヒ
よ。し。に。後。歴。み。か。人。轡。河。と。解。ア。舟。は。國。保。は。ひ。す。れ
鷺。衣。多。レ。して。り。う。れ。舟。の。も。が。リ。て。舟。と。よ。ど。そ。レ。
豊。之。已。家。を。よ。ま。え。と。ほ。う。は。う。じ。光。と。も。じ。る。に。舟。
二。州。乃。章。を。す。れ。ば。と。今。や。が。ふ。う。と。と。許。ま。ふ。於。是。十一。丙午
崇。三。月。より。入。壠。川。と。後。と。生。大。石。の。廉。穎。索。と。り。一。臺。之。
水。半。ふ。う。れ。と。と。と。と。と。代。と。う。と。人。號。船。の。號。船。と。と。と。
め。ぐ。り。名。三。人。柄。の。名。サ。ニ。よ。う。や。り。う。に。お。や。く。の。素。と。信。は。數
十。人。と。
お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。
ひ。う。廣。く。て。水。深。と。お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。お。と。
と。
わ。こ。う。は。今。と。と。と。と。舟。收。せ。ま。は。す。り。後。船。よ。舟。う。う。と。
五。穀。鹽。淡。材。石。す。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
十。三。日。と。

あり。ちしてかの人に船と見えやうが發てり。
奥まででくわどり。ひめの舟をさげふれり。
十三日信濃ふ天龍門を出。宿泊うち遠山の小野川と
舟と。余どあす則す工と。さくらに波流る
とびねり。幸浦ふと仲殿坐立。お
木島と連れまきやうじアシヌもて仲見の里
より下水術て運送。えま術の云ばん。仲の墓
もさすまよみりと。そろそろとうぐして
さくら風よだつよ。いのちやうふ難病素とて是
とくま。せうべ。不口ふ石とくま。ふくくま
うそようへとくと。たん。たましに富よもとく。鷹川よ
あこせだ。今のか浦門。十九年生ふくまつる大河塗
て。船のうしだやうじ。アシとくよ。アシとく病ふせくわ
ざうぶ。息ふとくとくてい。三月より後とれて七月小鹿。
テ以病起さり。慶長十九年甲寅七月十二。まゆ六十一年
五月二日小歿。慶長十九年甲寅七月十二。まゆ六十一年
五月の夏尚よと無國と達した。まよ隣じは達もする。
銀荷縁とひりて大典室の側ふもと。巨獨とあくと度じ。
犁と袂とて石轂と達する。後を達者よとひい罕と
を羅山林邸にとくと達する。と向ふりく。

那巨川。舟楫通。浮鷺水。梁如虹。矧復
鑿富士河。有成功。慕其賜。玄。笑。被
化。黄熊嵐山之上。号名不朽而無窮。

寛永六年冬十一月日

叶一保君の林先生の御文から一二とて澤せ
猶の碣絃よき。往々ぞ。

國。鳥音之一の名の貞順。本源寺一辺。江里。

推寫之手もかうどひの文書にあらず。まづ小説家と著
して舊書と讀むべからん。前山氏一とある。少く

即ち高え生ふやうえり。此人の経竹よりとも

ヒキアゲ

船宿の海小路の支度。運奇小舟一隻を預けた。

貞吉の帝をもて皇帝の姓で御名を御廟号をもつて向。

卷之三

まへまへとひきだすの文字の本を手
作りのほこちぬ極意のい竹子

新古今事記

トシテ能吸乃句とモアリテナラレトトあり。行水辟
匂集まし也。家水ニシテ西林ナリタハ。七十九ナリテ既身死

村上等銓

おとす。終へ平安。之際。池小波よせ。道といふ。業。て。十六

東山院のゆゑに御急症の如ヒ奉レ像は行服と仰。は

はおに新し。春毫院の二重の宸翰と碣と。御製と下
さう。まことに御うりと申す。わようする所より歌ともぞ

思ひ切らうて、もと御懇と洋せうが立ち入り。それから
御懇の本題と能を解き合つたが、お詫びするといふやうだ。

あら。けはや人間より多く食つた。おひ處所は
の不倒御酒。もくらはぬれぬるもよきと承りてあり
し。いとらえ。備前のかうを皆酒は投げり。又薩摩屋
乃医療せしも遠あり。寝あらぬに便と。よほ御せ
きあしに。はく船。お水で。内國の馬うりとあらう。されば
さうらと今も枝葉をもとめと見て。見てを有
と傳へゆき。の草がぬれとされ。日大響と。さる
馬うりと。とくせん。生産のあらゆりと。のじ。医術の
筆記若く。あらう。物の事とあらう。皆焼玉と。の
鉢等事とあらう。先まわ

萬葉三。すれ初のひをもてむと女が寝
かまづらしが。そひあがり寝みてかくねん。すれまく

三編執齋

三種希臘字へ書寫。即ちの如く。年へ難耐又不
料慮をもす。汝れか事小に。又は事に附す。ふむよ此の
爲より。然る。トム朱字。ノハ陽明良知の事と謂ふ
爲。東山濂源。トシ通と伝ひ。モ徳周。くま。東
北。平東屋。トシ。トシ。二段。後。御。と。アマ。御。
トシ。其の。前。と。アマ。又。酒井侯。御。と。
前。春明。トシ。トシ。入。事。者の。病。又。アマ。又。アマ。事。
々。至。事。の。人。術。と。アマ。バ。トシ。事。業。との。アマ。事。

あはれうやとちぬけし。うへきとひよく。あはれ
うへきをまうりやせすくめ。か霸者のまくらうり
物。うりりとこども矢弓まよびだ。ア森襲ふ。是ぞ
ものす。よ殿よせかとておとせりんとも。あ
物はと遠近とある。闇よとすくえすしと物と
様うがめし。うやうねやうといふ。終す自得のまよふ
あうべし。却とく我の闇もあり。人歌のゆ隠ひとは
案拂置して。意心固矣とまくわせよ。あそび諸
生へやう事へうちせり。是を薦す附へ法をす。
スカサハ多め。行となれニ歌の大敵ニ破
除よ。人歌ゆくをもるもふ。中も人歌くはるに別にまくわせ
二子の多め。其を薦す附へ法とまくわせ
キ。よだれとくじり。むかへてよまくわせよ。うがめ
ゆくをもるが歌とまくわせ。自よりとくわせ
たとくは食へ民食とまくわせ。一ロモもよまくわせよ。う
つま。食ふ湯りとく。食ふ事とまくわせ。傷とと補うて
ふな食とまくわせ。うつま。傷とと補うて
まくわせ。ト

其まはくの御の人所とまくわせ。著述の書へ易む記
二冊用ひ。一冊竟典の解一冊四言教解一冊傳音源
解三冊雜著四冊教錄。一冊がと音写本とまくわせ
まくわせ。先儒後牛氏とまくわせてある。牛氏
ありやうべし。かくとまく。先儒とまく。牛氏の間もくとまく。牛氏

馬うら。口言敵ハ陽羽
えきの既也。

無善無惡心之體

有善有惡之意

卷之三

其言無害無惡是良知

莫嘗去惡是極物

ひちかくへあそび遊ぶよ。まつり。年々新しくて、あれ
西まつりとゆうふくら。はまきを、酒とゆうふくら。おひな
そでうそとて、年々新しくて。ひまを酒とゆうふくら。さくら
のうふくら。このうふくら。高嶺のうふくら。とゆうふくら。おひな
まつりとゆうふくら。まつりとゆうふくら。

この種のじきがいあると云ふ事で門が下され松風の
三邊の邸よりかゝるのねど、そのうち半のれど老の
ほうからまへりて、さも無氣を遣ひて中身を窺はせん
墓うれば七十の付近づくが暮とも能と。向うまへても云々^{さつ}
さんまほらや。

先生の後に手が取れぬほども遠々。幸か不幸
二年もけました。まだ見えられ

御覽卷之三

七

元文四年冬

希臘十七史

後文と併せて寛保に承甲と題せられに致る。ま
幸一と六くよ思へにふくわづとをき美峰と刪び高
候地ふくよ。新著十卷より辨即辨すりて改去
の吉より。一己の見識とぞうべし。吾まに仕あひ
前じよもこれまく
養み辨ひよ。儒生著くよ。而
化せと前じよとす。之れと云葉

國へ出で。此處うちまの海市(モミシ)、
船を泊めて、よく開港ありますので、
一方院水の運搬が、海市へ

侍へまへうへりへりへりへりへりへり
松岡怒庵 附 始末

之庵の爲めに書いた筆字の序章。お前が尋ねた所の如く、筆の筋が入り
神速とまじての真詮湖のありより、平生の人を生ひ尾
張名渡るまぢ。津平圓角よりて、筆者そぞくむ和物也。」
ある。儒あるやう。詩経の名をと用ひ。儒生若れよと
かひよたまるとこ遍うむむ。人方鳴鶴で。甲子は清藤を
も題す。いづり物者もやが。もなまやう。およくまことふ
本物をさひ。はよむ筆へそほ。もよよわづか。降
笔ぬだ僕主の筆蹟のへきよとくのちう鳥へ。今もと年もと
二三箇と算べ。おまかづ食ふと二三箇。アラハ萬の筆。アラハ



まことにあれど
にかたの出では
廣島でとどま
うり下され考
其のほんや
てくゆるべし
よろすかとて
然いだるをう
てゆき外れ
そら枝の生
れすもふ罪う
あをひこ

主が一産あとつうてが才力にてのひがあつた。お
の實のあらむつる様三百石と限る。廣西鷹峯山にま
る奉と稱す。原を副をもじり自らまつて居る。ふむ
ア官府より。副はめまくまく。然らへんかうど
くぬよ済として居る。而してまづわざがさうした
がまことに向うべてふ奉の書と細じくなぐたうと
せ下と歎慕する。蓋候接物ありし餘者多く絶
前も後も無き。抱負全も等々よがれり

卷之三

石の庵の定成。名は正徳の字の義重。義重と号す。平生の人より。
寛文六年西月十九日に没る。先せむぐれにさか。才観潤翁、得、翁、得、翁
九十四歳也。けむはよどとぬ。爲人沉靜儉素。て英敏秀達。
猶もて家産殷实。精勤とく。て積金十石を有す。
小暮りて、がふ不休ととどども。貯まをあらひ是より。是より
とまで、宿食をもとす。すもくわざと十石の金を
うべ。そぞと取て、おふよ遊ぶ。よがり、おふく。才観潤と
ゆきと慕ひし。國は傳すうが。が、お寒い。私ち事
四年。すみはらむ。もとて、はるかに。おもて、はるかに。ま
はり、はるかに。はるかに。はるかに。はるかに。はるかに。ま
場とほんととけり。開とて詠した。その名りやうり
合掌よ。まくわが。即そくと門を一歩。湯の池と稱す。まよひて
まよひと詠説す。たゞ。因縁して、まくわが。湯の池と稱す。まよひて
まよひと詠説す。たゞ。因縁して、まくわが。湯の池と稱す。まよひて

先生の新傳をよめや。林渓の教説誰が深うん。布衣と
まくは僕寧へつた。まほよもうちゆ。己亥の夏入ふんと
あひ言とよひかねて。紹ううことゆ。筆が應す。さうも詠ふ
三年うとうを深ま年七月より病ひ罪のに付す。かむ六十六。酒
おもてたれ奉る。生座布衣もわかれがべ。また通勤か辞うて
めぐがよくなむもかくても候ふなどいふことをかねば。
お仕どりかくしゆ。凡そ費まきとまづぬし。かねばかくしゆ
國歌俳諧とも嘗てか。有事ときだ。『よみがおだす』
と人通の役と賣るの話と述べ。また仕事とナード。ほど
歸人以是由ゆつて二男ニキミを起す。また母ヤニキミが先人
生をもとめられてゐそ。おなき二郎おなじ道。そのあと迷業とよ
て讀書堂とちる。やの今橋乃山道。また陽をうき讀書の才過十希銀襪号佩革
見東都小禁び水うち後又はうつ一早かとぞ

ナニヤ素履爲清

名へす難棄系也。乃唐へますと。通称くへん。是へ空泊、
清華のくもく飛龍のくもく。鳥人鶴廉隱操也。筆氣雄ハ
分の諸絆と極む。初。清不正直儀を爲ひて。是れに立すと。は
魚一家と成。レ一せよ写。よき事。三海と號。毛莊と之
す。毛庵あと高柳よほ。ひとあかれて遊。う。西泉考
乃。山中て庵と號ひ。叶。其妻也。又に和す所へ。毛
光琳が庭。あれもほりよ。けふ。流す。蓮池は徑をう
ほや。おなじ處の辭。寺常。ふもと。もと。年生。根拠とゆ。治
すも。あくまどり。くへなれ。近傍の人々。一會の思
と。生すと。よとせ

下村道端

道端ア村長モノを參る。因方の事とやんすかひよりき。岸
小遊びて、盤の小屋作らふまじ。又まへ宇都美由船より聞。是
まつて近に山をまよはば、敵は向ふに情よ嫌よ連もしたと
あら。あら拘ねと制して、まよ代へ保焉、あらこくすまじ。さ
う。保焉のぬけや。さか健主十九人六十六年もまなされ。療
一風あり。病へヒタシモトマサヤシ。ヒツカナヒドヒムベ。療
詰め療はれ。おひ配くといつ。ヒツカナ氣象あはく。自のとて
在らむねとあせど。なにこのまよふ。立たへんめやべ。地は
小穴のよしやあり。ヒツカナアラホ詩のとる件か。一生
左ノアリ候。又琴と歌と改め。京と引と並び。ある。
詩家。詩作とよまと著。是の累の冗句が、庵と云ふ。
古の詩文の皆ひたり。沉絶のふも至るべの、漸くへり
青篇第墨すり。沉絶のふもよしたり。八病の詩には病と
解らへ。これとてよし。ハのじゆくとてよし。よし
す。竟章其病焉。其の病れのよし。その間の多きを教説
にまづ。青篇のよし。奇偶相争てよし。はのじゆくとてよし。
其の歌とよし。青篇のよし。奇偶相争てよし。はのじゆくとてよし。
其の歌とよし。青篇のよし。奇偶相争てよし。はのじゆくとてよし。
其の歌とよし。青篇のよし。奇偶相争てよし。はのじゆくとてよし。
其の歌とよし。青篇のよし。奇偶相争てよし。はのじゆくとてよし。

又樂府奇曲の如く。うふううもが考の主ふやうせり。絶れぞ
音律。音小ちて。倚頃。渙字。と。も。細。よ。懸。よ。が。手。度
の。活。り。活。圓。と。化。り。そ。聲。あ。り。と。可。あ。れ。が。那。裏。よ。れ。た。考。の。詳
ら。ま。と。す。そ。も。の。ら。ま。と。可。あ。れ。が。那。裏。よ。れ。た。考。の。詳
に。う。は。う。や。詩。書。と。也。經。書。に。系。と。い。双。聲。を。敵。と。た。
詠。も。歷。代。を。獨。く。下。李。平。歸。王。元。義。よ。事。よ。も。圓。惠。姑。う。ま。
あ。う。の。者。く。空。期。と。も。考。の。此。は。か。く。嘗。に。諸。家。皆。此。ま
ま。あ。こ。る。ひ。ふ。廣。磨。れ。僧。文。之。ま。と。ま。に。え。之。見。行。丈。持。
を。用。す。近。世。近。代。の。け。平。仄。と。用。る。の。す。て。け。と。唐
し。い。い。ま。わ。か。く。よ。う。と。き。一。詩。の。主。詠。ま
ま。じ。そ。入。息。ま。る。き。改。か。せ。の。り。ひ。考。れ。な。よ。恐。く。く。れ。ど。も
不。文。華。ふ。の。手。も。せ。と。い。う。做。密。の。ほ。か。く。も。悦。と。ま。ば。
と。赤。あ。ら。ふ。生。ま。と。か。と。歎。ほ。物。の。想。と。生。じ。な。く。ま。
そ。う。お。ね。う。と。さ。よ。お。ね。う。べ。け。老。殺。と。つ。り。く。人。乍。それ。れ。
修。よ。こ。れ。を。痛。と。考。る。彼。忌。と。さ。よ。う。く。う。ん。と。ゆ。よ。う。

詩家音律凡例小引

ハ病在五字内謂之急。在十字内謂之緩。緩急之度
謂之節奏。節奏也者。其作詩之本歟。豈啻詩已。凡百
散文僨文亦皆雙聲疊韻也耳。而今吾邑之士。絕無
講求。雙聲疊韻者。余甚惜焉。故著茲編。并凡例云。

泰宇下村道瑞謹識

既約うハ病も生ざれず。然るより不羣と

平頭 上句第一二字與下句一二字同聲

蜂腰

第二字不得與第五字同聲

上尾

第五字与十字同聲。如：

畔艸。欝欝園

中
攝
是
也

鶴膝 第五字不得與第十五字同聲

大韻如聲鳴為韻。上九字不得用驚頓平榮字。
小韻余本韻一案外。八字不得用丙字同貫白進。

六書
陰之韻一空夕力也、不釋兩字同音如益微
同韻也

正紐 詩病有正紐傍紐。謂十字內兩字雙聲為正
紐。若不共一紐而有双聲為傍紐。如流六為正
紐。流桺為傍紐。

奧田之角

三角亭記より摹詣をすがまつたに得ぐ

三角亭記

余嘗於後圃中開試馬場。長不及五十步。廣僅可旋馬。傍植花卉。外鑿芙蓉溝。內築小堤。偶記前退翁三角亭詩。曰。春無四面花。夜欠一簷雨。同詒錄花為韻作。余仁廓。余愛其句。深服其意。凡天下之花無四時無五色。雖有躉躅紫燕稱。四季歲中三開耳。余家五色梅分淺深紅。足數何索墨梅。何貪四面。竊思三角之為物。則方之半矣。缺盈之戒無以加焉。因欲倣之。構亭於西北隅。庶乎不妨旋馬焉。有志未果。客歲病眼。折足。不堪騎乘。遂放馬。徵調馬。鋤。鋤。為菜圃。今茲春晚。有人告曰。有厥村價不滿一貫文。盍安堤上也。余心搖焉。召二老僕謀之。食曰不用。請陪其價。可辦矣。日亭午。此去神山幾里。春水方漲。編竹束。流二人而足。余從之。薄暮果致。木村十餘根。於門下。明日召五構之。曰。祿存斧鋸痕。謹勿施。龍斲不日成之。又翌日葺第。至三日落。時三月十二日也。揭蓬窗子扁。忽官書至。飯于亭。歸于府。他日心常在此亭。七月之望。歸鄉。坐卧亭中。仰看青山。俯觀紅蕖。始償平生。因爲之記。云。以是名之。蓋況三角之名。毫不可謂。

三角亭詩

桑瓠空負四方志。三角亭中夢亦奇。忽怪蟲聲開一面。深歡月影照多時。人間交際事。謙損天道循環警。

滿虧窓自不妨。八風至林頭長掛退翁詩。

又

三魚亭中獨煎茶。人言封閉縮如蝸。直方難處下流地。圓轉何停峻阪。汝有永有山常可月。無冬無夏永觀龍。比年患眼偏嫌白。藍紙粘窓同碧紗。

壽碣銘

奧田士亨字嘉甫號蘭汀。曰三魚。南山古稀所賜號也。小字宗四。宜休大人季為伯龍溪嗣服嫂堦口氏喪十四遊學。字治十九上京師事東涯先生。十一年升二十三。命授名物六帖。深叶師意。爾後編述必專任焉。升九擢津府賜十四俸。戊午加五口。甲戌蒙命校明史。半年。旬豆竣功。癸未領百升石。庚寅東下留押。

郊九月壬辰班掌鎖右褒學術也。甲午轉中廳賞薑書萬卷與家丁卅員器械也。丙申告老尚賜退俸十口。隔日入侍或至夜分。所賜書畫扇巾衣裳至襍帶山積不止等身矣。今茲己亥不幸會嫡士元喪忝蒙丙公存問。仍有花餐賜臣庶之家未之前聞也。時歲七十七。先嬪土井氏二男。次曰正集。冒岡部。二女長配侄士弘。餘夫後嬪細江氏。一男曰叙典。冒吉村內外孫十四人。歸孫七人。五十年來門生踰八百。今存百數。身後恐或溢美。自撰壽碣銘曰。

起于田間。升中廳直。何以得之。誓古之力。

加之美稱鳩

加之美稱鳩。甲斐國山梨郡山王佐

ア。已くうきよもあかり。祚とも佛をもなしやまもくへす。
はうとおきのゆゑをもそし候とひよ。かくらめくわまし。
もうぬじてとくの。候をもそそりけり。ほどの行とく。
お義すはうとくとく。祚とぬうぐのすまくわまし。
ううとく。また一ま生もあそひ。すれども諸侯の尼小鹿び
醫官に食せざる。縁とありてふれゆ。ア候もまくとく。
祚の意あまれき。縁とひて傍承さんとももくとく。
ぞく。解てあんや。ひうとく。義曰。故林官の意よもくとく。
三男も。古よ家事にあつて。醫を業とするひの令。ア法
ほむむ行て傍承となつ。先祖を仰しきふうべ。先代の鑑
真太さう。當時空家もくとくとおもやしめ候ばかり。候れ
がくふ背の毛むねをなす。ア下はてゆく。また世のう
きくむせうる。アうるゆまもまきなり。角山と我邦より
是れ。又あれ多めと傳じてゆきまことに。アのうれい曰。我邦
カモトの國なり。アまかうたれど。もとと民小敵され
音邦へま國へ。陰陽を配され。我邦へ湯。湯のれすふとくよ
めよ。まよふれたうり。ア壁。音山の壁。湯のれすふとくよ
がた。竹木室とく。皆。湯のゆぬよし物もあらず。是と
國の事とく。判ど。テ餘往多きゆも都よし。思考又多
きと多く。やまと皆是夷也。もすて奇一局記述する
とそん

ありの鳴りに身をふるうつぐとせく

あらまくまづよもあられよとそくおもよもくと

續摩人傳



卷之三

御湯ふくわがまふかと申す。ひあと一や戻るふ。其の後も
へり。まあのどのをとおとてくわば急振朴裏すまう。ま
もあわじやめふがおれの御湯ふくわば。又暖門とまこ
そくとなくひよこのおまことに小室一つもあらわす。
アレんとおもた。おもしてなま。思はして。まよ行乃
きる。まほよおけとおもあは。不思議みまつまひつへり
ゆまづらぬら。かれ一いつあに今。おうのやまとめうり。お
と同よ。おもあはひお迎山づらもおふやまうぬまう。
おやえの体もまぐらおまんと。粥もお燒てうな。さ
あーのゆきまうはい。けひうへく甚しきはり。やま
りよはうてうけ、めくさりよ。あくびわく津よかとくべ。あく
みよふよとくやあくとく。假巖山よお魯うり。あど。こ
みよかわくわくやあ。おと伝統とくよじよ。こ
え。それより奥山とゆ。巔と極めあまとく。西岳より青
竹うねり天の達摩をうかと。こ度よとひのぼりつて硫黄
八重山不撫してねじてと。元は向うからひふのひとを
ひづく。宣て遠都をわ。もとく人の直すまう。俺
雨ニ獨多事の遅とむかしに続け。おびく。あふ
する。一年。今やレシよまの事とも。ほくわく。さて此
老の切くとぞ。アドリ開てのまちのよしと。おやつは
いはとうなと。おもよ。おひいがく。あやゆ。降雨水を
うやくとく。おのの始てうとうと。よくある。と。四
かまづはまく。おとすと。こすと。おとすと。おとすと。

其謂庵社以

真觀尼社に生源佛詔を乞ひた向とも多き也と
ノリ退隱する所の事印矣やま一
くらまへれどもトトモはるゝ事

此句すとおもへどもして書ひ。雅俗聞見の
様よくすゞ一説結せり。かういふ。考後年、華乃
在す。の事かえまのうづきと云ふ。又舟と聞
ふ。すと筆はやうせきつねとほと。往々よふて根柢
も強ひし。凡二万卷よりの書本と申す。相識の人
またおもむかへる卷をとづいてある。もやぢり。ば
六すてしからまことたるの事よ入らむ。

游野航水

播磨加古郡別府村の人。鷹野新之丞。別號を
角得(つのり)。嘗て齊龜水(さいごんすい)へ仰詣す。稱す。不善也。

ま不私七被すてはほの豪富がゆき遊蕩のた
めに貰ひて少し後の貧窶なりなま得せ承み
酒食を以て是迄。酒半價初一喝略一粒と御
ある。は。飴もゞれ流とすうて、領地を巡覽の
ほりも毫小聲とぞめだす。まよひびと飴もゞれ
あわて不思議て御城へる。二三と煙草せりしが
ばうとうふ。モ夜月とくらべてまうりを。頃度の時
少々一にて何事なくかかれていた。ア波村小川
の橋を渡りて、跡を下りて、そぞろての農
のむかわく人あづれば、むづくとも、あづく門おどんとせ
し。のま屋さうく情の錦と窓紙とあつとせん。
京より一はも魚と勝手。如流トハ画直(おほ)儀也

ちをと家へお出でな
う一房は秋味のけい脇のす
にまつたぬきの巣にて度とい
てまつまつ

又はの氣きの者遊あゆ
ほんりと倭く
みておまやうかに新蓮草^ハ
草

母の妻イ暮

達磨もさすがに西行の義理にて、竟もかたどりてまつらひの義
主乃はくとりよりよき事にてやうてのちうてのちうての義
義者一とまゆすあくとまゆす

對していざままでその片づ西
生海のまゆすはほうとるを須磨れぬ生
七十六七ばかりすとむかひと

う森正因

正因も森氏号寂雲。本肥後國河瀬大宮司三家乃
内アノ内比之義村とも云ふ。森の姓アノ姓にて。紀伊國より出医取
りと業へて、又佛業も拂へ。生も老くして一切作と
詔も書く。又小僧たるを定河の舟中にて泉
涌すナ一来遊院をかく相思アラモトを願とす。隆國て
は久の吾院了高庭アシタマとぞや遠里アシタマてゆふと二年。
院の門の外と里では、必ず西へ住む御道不間ま
広をしの東へ通術と施す。持物小もす。其一とそ
大和高取侯の持ふ塵アシタマてゆく。もや半身あわね
ひよくましとふ。あひみゆるはくまく。空
とき清體アシタマすと一説アシタマ。ゆすえとらきて。説て曰。植
えふるうわや。さひと葉と遊りふ忽換アシタマ。かすと
すん。け新れまくん。よよせたれ。ふすむうち圓歌と
いひ。時ふ

靈光上室。仙洞より磨の社と造りせらるて。よ
ちく石邊と坂を経て。正因藏やうぶの像門庭
の傳承あり。奉つて。墓廟也。懐ひとす。

年多全及び下町の毛跡千庵の相と覺せ。それ
御醫へ下すと。あく大己貴令ハ主の
哀絰を賜て。御よほ服より進む。且和歌と唱
處聞る達うれば某卿の傳奏より内絰二十肩と
あり。と。恵帝御よやく。東薦亭の号と傳
ひ。と。と。おへ不^{ハシ}。て。もうも腐食に
持ら。くもりと。うすすも。う歎の肉をもらひ。教
生にあづくふやとせば。寢永休^{ハシ}のゆくは勝^{ハシ}
敵とり。藥を表して病者よだやく。あど善業人の
にふあり。七旬有餘^{ハシ}。病ふく前元日とかり。
陰脂を薦し。端座^{ハシ}して逝^{ハシ}。醫術のまほ
そ家よ傳^{ハシ}。一生不^{ハシ}。くよばよ^{ハシ}。養和寺集
ハ一旦下り下^{ハシ}。と。火のこ^{ハシ}。ちかう^{ハシ}。ゆうり
の人乃書集^{ハシ}。うづ^{ハシ}。ちかう^{ハシ}。と。毛^{ハシ}
早春。毛^{ハシ}。雪^{ハシ}。ま^{ハシ}。青竹^{ハシ}。生^{ハシ}。先^{ハシ}。ゆう^{ハシ}。毛^{ハシ}。の^{ハシ}。り^{ハシ}
あた^{ハシ}。日^{ハシ}。暮^{ハシ}。の^{ハシ}。山^{ハシ}。家^{ハシ}。月^{ハシ}。と。ゆ^{ハシ}。むの^{ハシ}。あ^{ハシ}。と。み^{ハシ}。け^{ハシ}。よ^{ハシ}。う^{ハシ}。の^{ハシ}。毛^{ハシ}。の^{ハシ}
不^{ハシ}。道場^{ハシ}。うづ^{ハシ}。の^{ハシ}。の^{ハシ}。と。ま^{ハシ}。う^{ハシ}。は^{ハシ}。や^{ハシ}。と。葉^{ハシ}。の^{ハシ}。毛^{ハシ}。の^{ハシ}
よ^{ハシ}。う^{ハシ}。中^{ハシ}。の^{ハシ}。も^{ハシ}。じ^{ハシ}。う^{ハシ}。が^{ハシ}。よ^{ハシ}。く^{ハシ}。う^{ハシ}

端文仲

即家伯翁

中就有差人手。此事今尚付于胸中也。

三
平
方

○九齡字伯奇号蓋山人。平生へか藤。近に住く本山
乃隣はる邑の人詩ともうとも書じ。善く一て、或有
小謠よせ。家才に量を絶り化邦小丑。後烹作風流
極圓よう。一母あれ孤ようにて。そすよ解き家才
往く國へ醫人多く多能。或突厥の手と云ふ。今
伯奇は詩家と教授し。そくすよ奇とよ聞。或すよう
而詠乃約奇とてちもすうと教失ると。故は起々人
ひくに至らぬ。も二三首たふ等く。性貌甚風貌古
且古風と統括もうとゆ。人を絶倒せし。其年少
へ是陽明の事と傳へ。京師中すてや名とまほ
斗る。之へ病へ死す。とじて

此汎湖二首

萬頃煙波涵大清。琵琶何歲作湖名。園存石鹿皇。
都跡藩壯金龜侯國城。諸島爭奇盤上峙。千山浸
秀鏡中平滔滔八百余川水。向此朝宗日夜聲。
西北名山數十峰巍然翠画中濃風前吟鳳笙。
洲竹磯上卧龍疊館松。天接中流涵日月。地開東
海吐芙蓉。丈夫不識名區壯宇宙。何由披曠胷。

寄東適禪師

高僧丈室倚巒。千仞機鋒凌碧宵。講法臺前馴猛虎。參禪會上斬兒猫。寒溪明月敲冰澌。暮嶺白雲分雪樵。久抱煙霞負蓮社。思師永夜夢魂遙。

壘帳秋風憶漢都君王命妾和單于此身空解誤

明鏡恨在娥眉不畫圖。

傳
文
門

は危う焼失して。また筆を下さる所へ歸りて。一
丈五尺の御手紙。其の内。所縁とあり。つづふ右の行
甲類の手書。何んなり。かく。かげ。よし。佛工の
跡とある。高野の田中康朝。許多の金をもてられ
とき。勝りて。佛工ともうまく。也。併縁あゆ。了
の内前と傳す。爲方の本乃は。工法度。作成。し
て。ふちまく。又。その。経。ふち。の。筋。は。す。て。名
達。ア。ミ。ミ。ア。ウ。サ。ヒ。潤。ス。カ。ヤ。ト。世。の。筋。ア。モ。ル。カ。ギ
惠。仰。す。て。そ。と。ら。ハ。一。晩。後。ト。す。と。と。門。向。シ。て。は。う。り
て。全。を。往。て。お。西。ま。わ。す。か。ソ。と。う。と。お。門。向。シ。て。は。う。り
と。供。ま。わ。す。も。う。よ。と。う。え。の。ま。ま。ま。と。て。葉。は。の。を

丈の室と再建して門流と號す。又もまかの僧行持と
奉りてらへ付ゆ。とまつと音ひてさよひふとし
そ處の様うる事多し。天物の中にも。また修みす居
るはア室ゆよ。泊庵へりつまとたす。同志の人との
はぐくお見と教ぶ材。こうたんくわく。うるはやく人や人乃
ほらとあく。ほらと。あらとまく。やしと。危義と。か
けらの母もあくまく。癆病の母もいやう。つむよ。ぢぢ
子泊庵の院より。あり。泊庵にて。泊庵にて。泊庵
道中も。著一まい。なりて。のちに。立そくの泊庵。
今たよ。得く。生後の。も。向れ。食え。まよ。の。おれ。入。書
ざりて。あきと。ひどが。さよ。贅せん。之く。病して。ついふ。
す。今。従月。廿。日の。候。力。す。れ。ま。翁。六十。育。三十。よ

長崎泊庵記

幻門法師不慕榮利。不驚寵辱。所談者清玄。所詠者
俳諧。性好山水。探名區。攬勝槩。退跡幾。極四海之賓。
而一寓。諷諷諦焉。其處于岡崎也。並街巷。背山野。可
為聘心。月而寄遊。暢乃憑神足之遁也。近更上一宅。
乃東距數百步。為古法勝寺跡。曰結團瓢。分白河水。
帶其門。橫畧約入之。只尺間頓隔。凡境。南面華頂山。
紫翠聳出。列松之際。東則南禪之樓禪林之殿。正亦
與軒楹相當。時則作鐘磬之響。如意瓜生。諸峰逶迤。
而北至以處。更開一窓。受之。乃黑谷翁鬱擁其前。使
四明迥以臨焉。至於雪月花樹為之裝飾。則四時夢

朝暮換不可勝狀。蕞爾一團點席。僅函丈而氣象百
之。午盡在几席間。不亦奇乎。法師既多。四方交遊戶外。
之屢未免雜還。則今之所營。唯同調者。而得以下榻。
云乃渴。余謂曰。某老矣。不復從運東西。其臥而遊
也乎。顧其所宗。獻穢而欣淨。是誠何心哉。師其忖度
而命之。余曰。有是哉。其惟泊乎。夫泊也者。寄身一葦
之。上下無所定。四維無所亞。必也知其所止而後止
焉。然目不得不視。耳不得不聽。彼寒山之鐘。江楓之
火。亦無所待而有所待者也。經不言乎。見聞如幻翳
于。岸如旅泊。故見而翳之。是謂不見之見。聞而幻之
是謂不聞之聞。居界出界。方便之門。其在茲與。君豈
所待是舍諸。且夫華頂禪林。黑谷者。皆君所宗宗。正
之點。非所以羨牆于旦暮乎。昔者吾平覓國師。居相
之三浦。名庵曰泊船。聞芭蕉翁寓武之深川。又有泊
船之坐。是猶有繫乎水。與船者也。今法師之營非水
而山。不船而泊。泊之時義於是遠矣哉。法師因善哉。
請記斯言。勿忘。

天明丁未十一月

淡海竺常撰

泊菴本為朋簪而設。既而以謂樹下塚間。非敢所望。
降此則一杷之茅。猶為有餘。多可有長物乎。遂乃捐
之移於陽南道院。替為佛室。畧無顧惜。念於是泊菴
之無泊。名實念副。烏耶大典禪師所為。以為得其實。
矣。唐詩有之。雖然。一夜風吹去。只在蘆花淺水邊。法

師之視泊菴殆亦如斯夫。此之平泉之石。賢愚相距。
何如也。因記之以附前記之後。

寃政癸丑孟冬

六如杜多慙周識

古谷文譜

